

研究 1

CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化 ～小学校外国語教育に向けて～



研修員 青山 純子

目 次

I	はじめに	1
II	研究の概要	2
	1 研究の動機	
	2 研究の目的	
	3 研究の方法	
	4 研究内容	
	5 研究に出てくる用語の定義	
	(1) CAN-DO リスト	
	(2) パフォーマンステスト	
	(3) ループリック	
III	実践事例とその評価	6
	1 評価基準の設定について	
	2 実践例①「聞くこと」に焦点を当てた実践	
	3 実践例②「読むこと」「書くこと」に焦点を当てた実践	
	4 実践例③「話すこと（やりとり）」に焦点を当てた実践	
	5 実践例④「話すこと（発表）」に焦点を当てた実践	
IV	まとめ	26
	1 CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化について	
	2 教科としての外国語教育とは	
	3 さいごに	
V	引用資料・参考文献	28
VI	資料	31

I はじめに

中央教育審議会初等中等教育分科会より「新しい学習指導要領等は小学校では東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年から、その10年後の2030年頃までの間、子供たちの学びを支える重要な役割を担うことになる。この2030年頃の社会の在り方を見据えながら、これから子供たちが活躍することとなる将来について見通した姿を考えていくことが重要となる」と述べられている。2030年頃には世界各国とのつながりが一層重視される社会になることが予想され、外国語によるコミュニケーションの活用が必要不可欠となるであろう。こうした社会で出会う様々な課題を解決する資質・能力の1つとして、外国語を身につけることが求められており、そのためには小学校から高等学校まで一貫した目標を設定し、外国語によるコミュニケーション能力を確実に育成することが重要となる。

新学習指導要領の導入により、聞く・話す活動を中心とした外国語活動を小学校中学年に、さらに、読む・書く活動を加えた全ての技能を含む外国語教育を小学校高学年から教科として、平成32年度以降実施することになる。実施時間については中学年では外国語活動が年間35時間、高学年においては現行の外国語活動（年間35時間）に加え、年間35時間の授業時数が必要となる。来年度からの移行期間では、各学校の現状や実態に合わせて、上記であげた時間数または、中学年で15時間の外国語活動、高学年で50時間の外国語活動及び外国語教育を実施することになっている。

中央教育審議会答申では「小学校高学年の外国語教育を教科として位置付けるに当たり、『評価』においては、中・高等学校の外国語科と同様に、その特性及び発達の段階を踏まえながら、数値による評価を適切に行うことが求められる」と述べられ、従来の外国語活動で扱っていた「文章の記述による評価」から評価方法が大きく変わることになる。

そこで、「どのように、授業を進めて評価を行うのか」という点について、指導と評価の一体化の観点を踏まえて研究し、今後の小学校での外国語教育の充実につなげたい。

Ⅱ 研究の概要

1 研究の動機

筆者がこの研究を始めたきっかけは、なぜ、小学校から英語教育の早期化・教科化が導入されることになったのかが気になり、調査したことにさかのぼる。「外国語現行学習指導要領の成果と課題（中央教育審議会答申）」において、「小学校での外国語活動で音声に慣れ親しみ、聞くこと・話すことを中心にしたコミュニケーション活動を基盤に置いてきたが、中学校から教科として外国語教育になった途端に文法等を中心とした知識重視の授業がなされ、高等学校に入ると英語を使用したコミュニケーション活動の機会が減少していく傾向が見られた。つまり、進級・進学した後で、それまで学んできたことが発展的に生かされず、中学からの外国語教育において言語活動が十分に行われていないことで、目的・場面や状況に応じたコミュニケーション力に課題がある」と、指摘されている。

こうした課題を解消していくために、「英語を使って何ができるようにしたいのか」という小中高を貫く目標を設定し、「どこまでできて、どこでつまづいているのか」を把握して、互いの学習到達度を確かめ合いながら指導することが求められるようになった。そのためには、各校種で到達目標を明確にし、共有し合うことが必要になるとともに、目標達成に向けて授業を実践し、目標が達成されたか否かを確かめるために評価を行っていかなければならない。これについては、文部科学省が既に中・高の外国語教育に向けて「学習到達目標設定のための手引き」（2013）を発行して呼びかけていたが、以下の調査結果（表1）を見ると、まだまだ課題があると考えられる。

①「CAN-DO リスト」形式による学習到達目標を設定している学校	
	H28 中学校
国の結果	75.2%
県の結果	100%

② ①の学校のうち、学習到達目標を公開している学校	
	H28 中学校
国の結果	12.0%
県の結果	5.8%

③ ①の学校のうち、学習到達目標の達成状況を把握している学校	
	H28 中学校
国の結果	34.2%
県の結果	12.3%

表1 「平成 28 年度英語教育実施状況調査(文部科学省)」

この結果から、学習到達目標を公開している学校数、到達目標の達成状況を把握している学校数のいずれも、半数に満たないことがわかる。

今回の事例は小学校英語を扱っているが、小学校のみでなく中学校の指導者も小学校と共有する目標を設定し、その到達度を評価する指導を実施することがより一層重要になると考える。

2 研究の目的

CAN-DO リストに基づいた指導計画の立案から、評価規準の設定、評価の判断を4技能5領域別に行い、事例を挙げながら、指導と評価の一体化の重要性や研究から見えてきた課題等について考える。

グローバル化が進む社会では、国内の人々とはもちろん、世界中の人々と協調して互いの意見を出し合いながら結果を出していく必要性が増す。与えられた知識を取り入れる受動的な学習法ではこうした社会に十分対応できない。

グローバル化社会の中で自らが積極的に考え、判断し、身に付けた知識を用いて相手に自分の考えを伝えて話し合うことで、問題解決ができるよう求められており、新学習指導要領の目標・評価の3観点の1つに「思考力・判断力・表現力」が挙げられているのではないかと考えている。外国語教育ではこの観点が身に付いているかどうかを測るために、パフォーマンステスト〈定義についてはⅡ5(2)〉による評価が行われる。そこで、その評価についても本研究で取り組む。

3 研究の方法

市内の研究協力校において、全16回（平成29年9月5日～平成29年12月19日）5、6年を対象に授業を行った。

5年生は、平成29年度から、週1回の外国語活動により英語に慣れ親しんでいる。ALTとふれあうことを待ち遠しく感じており、学ぶ意欲が高い。週1回のみ授業で、学んだ内容を保持することが難しいため、授業の最初に必ず復習の内容を設ける。授業は、外国語指導助手（以下ALT）がすべて英語で行うが、内容を理解するのが難しいと思われる場面では担任が日本語で簡単に説明することにより、児童が安心して授業に参加できるようにする。

6年生も週1回の外国語活動で英語に慣れ親しんでおり、昨年はSkype（インターネット電話サービス）を通して海外の児童に自国の文化を紹介している。完全に英語がわからなくても、ジェスチャー等を使って手持ちの知識を駆使して相手に伝えようとする意欲が高く、英語を話したいという気持ちをほとんどの児童がもっている。

研究方法については、まずは、CAN-DO リストについての文献に当たり、文部科学省から出された資料に基づいてCAN-DO リストの作成をする。その後、「Hi, friends!①②」の各単元のねらいを把握し、作成したリストを用いて単元目標と評価規準を設定し、指導計画作成後に授業実践をする。各単元終了後には、テストを実施して、評価規準と照合して評価の判断を行う。なお、本研究で実施したテストの結果については成績には反映させないこととする。

4 研究内容

始めに、新学習指導要領に基づいた年間学習到達目標を作成し、具体的な目標が設定された授業計画を立て、それに従って授業を実践した。設定した目標に達成したかどうかを確かめるために、テストを実施し、評価を行った。

本研究では、研究協力校の小学校5・6年生を対象に「聞く・読む・話す（やりとり）・話す（発表）・書く」の4技能5領域を測定するテストを実施した。聞く・書くテストについては筆記テスト形式で行い、話す・読むテストは実技形式で行った（話すテストはパフォーマンステストを実施した）。

テストでは基準表を作成し、その基準に合わせて評価を行った。テストの結果から目標に見合った授業実践ができていたかどうかを確かめ、改善すべき点を検証し、授業改善及び、目標設定の調整を行った。（表2）は以上の過程を図式化したものである。

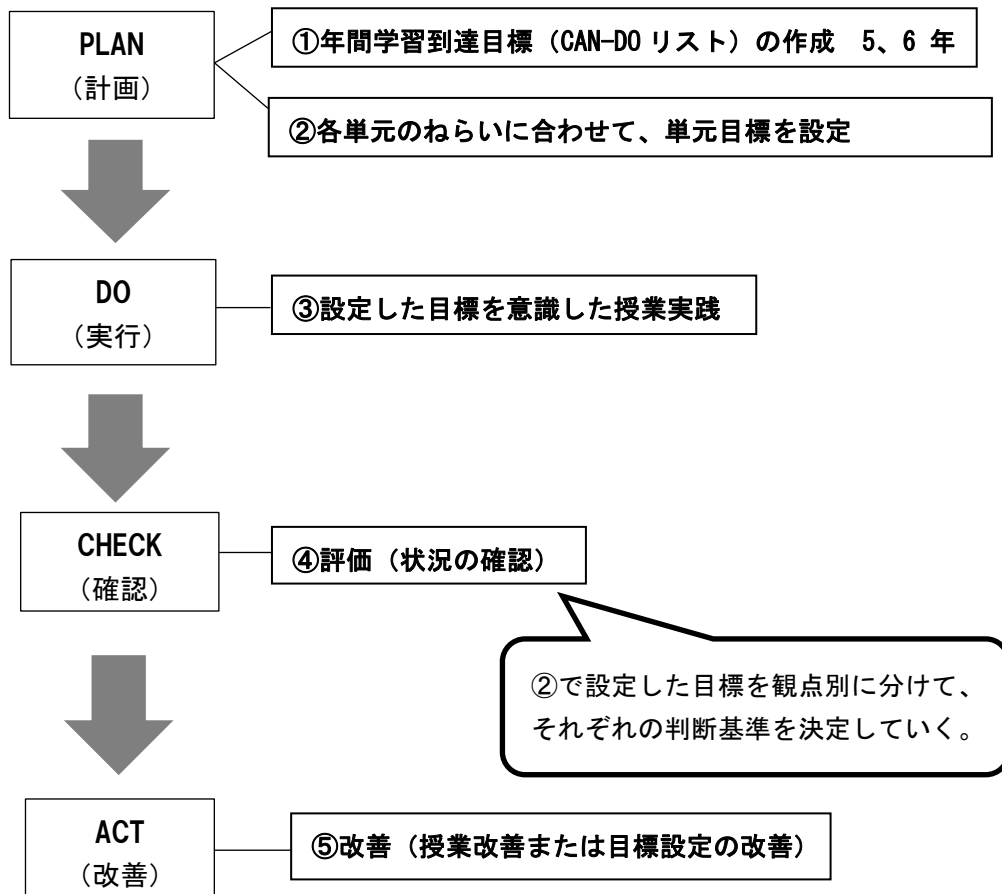


表2 「研究の流れ(文部科学省 2016 を参考に作成)」

5 研究に出てくる用語の定義

(1) CAN-DO リスト

進級・進学後、それまで学んできたことを生かしきれないという課題を解消するために、小中高で連携して、互いの学習到達度を確かめ合いながら指導するように文部科学省から求められている。

そうした状況の中で、「英語を使って何ができるのか」を踏まえて設定した学習到達目標を、4技能5領域「聞く・読む・話す（やりとり）・話す（発表）・書く」別に具体的に表したものが必要になってきた。これがCAN-DOリストである。

CAN-DO リストは、平成25年に文部科学省が詳しく示しており、記載されている文法はすべて「～することができる」となっていて、主に、「①卒業時の段階で何ができているか」と「②学年ごとに何ができているか」の2種類がある。特に、②のCAN-DO リストは、年間指導計画や単元計画と関連付けて作成するもので、指導者側と学習者側において有用なものとなっている。

CAN-DO リストは、学習の到達度を表す指標であり、指導者、学習者の双方が活用できる。指導者側においては、学習者がどの段階まで理解しているかを把握して、何をどのように指導したらよいかを計画し、授業実践後、理解の到達度を確かめなければならない。学習者側においては、自分自身がどれぐらい理解しているのかを知ることによって、次の目標に向けて何を頑張ればよいかのかわかり、意欲が高まる。

今回は、新学習指導要領や先進校での取組などを参考にして、小学5年生と6年生のCAN-DO リスト（案）（**VI 資料1、資料2**）を作成する。本研究ではこのリストを使用して、評価を行う。

(2) パフォーマンステスト

パフォーマンステストについて、佐藤(2014)は「具体的にはエッセイ・ライティング、プレゼンテーション、インタビュー、ペアワーク、グループ・ディスカッションなどを使ったテストのことです」と述べている。筆記テストとは異なり、自分の考えや思いなどを相手に伝えたり、発表したり、書いてみたりするテストである。相手とのコミュニケーションを積極的に取ろうとする姿勢があっても、筆記テストではその意欲を確かめることは難しいので、パフォーマンステストが有効と考えられている。

(3) ルーブリック

パフォーマンステストを評価するために必要な基準表のことで、泉(2017, p. 256)はルーブリックについて「それは横軸を『観点』、縦軸を『レベル』として、観点ごとにレベルが一目でわかる評価基準表です」と述べている。写真1にルーブリックの例がある。具体的な目標が、項目別に挙げられており、目標をどの程度達成したかを知ることが可能となる。

また、ルーブリック作成上の留意点について、泉は「ルーブリック作成は担当者一人ではなく英語科全体で取り組むと、主観的になりがちな発表態度や技能などの評価を、より客観的にすることができます。また、評価基準を共有することで信頼性が保てます」と述べている。それだけではなく、学習者側においても、泉は「あらかじめ

ルーブリックの内容を知ること、意欲と明確な目標を持ってパフォーマンス課題に取り組むことができます。そこで、動機づけが高まり、主体的に学べます」と述べている。ルーブリックの使用により1人で評価するよりも評価の観点や基準が客観的になるとともに、学習者の達成意欲が高まるのである。

ルーブリックの例

6年「I have a dream.」パフォーマンステストルーブリック（試案）			
【パフォーマンス課題】 ☆将来の夢や就きたい職業についてスピーチする。スピーチの内容について、相手からの質問に答える。			
	知識・技能 「言語（L）」	思考・判断・表現等 「内容（C）」	主体的に学習に 取り組む態度 「態度（A）」
A(3点)	・本単元で学習した「I want to be a ~」を使って、将来就きたい職業について話し、3つ理由をつけて語順も音も全て正確に話すことができる。	・将来就きたい職業について話し、既習表現（I like ~、I can ~/favorite など）を含めた3文以上を使ってその理由を整理して伝えることに加え、且つ聞き手に質問をしながら伝えることができる。	・指差しなど写真等と結び付け、ジェスチャーなどを効果的に交えながら聞き手に分かりやすく話そうとしている。 ・明瞭ですべて聞きとりやすい声の大きさで話すことができる。
B(2点)	・本単元で学習した「I want to be a ~」を使って、将来就きたい職業について話し、語順や音の間違いがややあっても理由を話すことができる。	・将来就きたい職業について話し、既習表現（I like ~、I can ~/favorite など）を含め2文を使って理由を話しながら、自分の夢について伝えることができる。	・写真等を提示しながら、聞き手に分かりやすく話そうとしている。（ジェスチャー等はなし） ・聞きとりにくいところがあるが、概ね聞きとれる声の大きさで話すことができる。
C(1点)	・「I want to be a ~」を使った定型表現で将来就きたい職業について話すが、理由が1つも話せない。	・既習表現の付け加えが全くない。（詳しくできていない） ・何を伝えようとしているのか理解していない。	・指差しができていない。 ・視線が聞き手と違う方向を向いている。 ・声が小さくほとんど聞きとることができない声の大きさである。

写真1 「ルーブリック(京都府南丹市立殿田小学校『研究紀要』より)」

III 実践事例とその評価

1 評価基準の設定について

評価基準を設定するには、各単元の指導目標や学習内容等に合わせて基準を設定することが前提となる。本研究では、CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化を図るために、具体的にどのような流れで評価を行ったのかについて、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（H23 国立教育政策研究所）」の形式にならって記した。

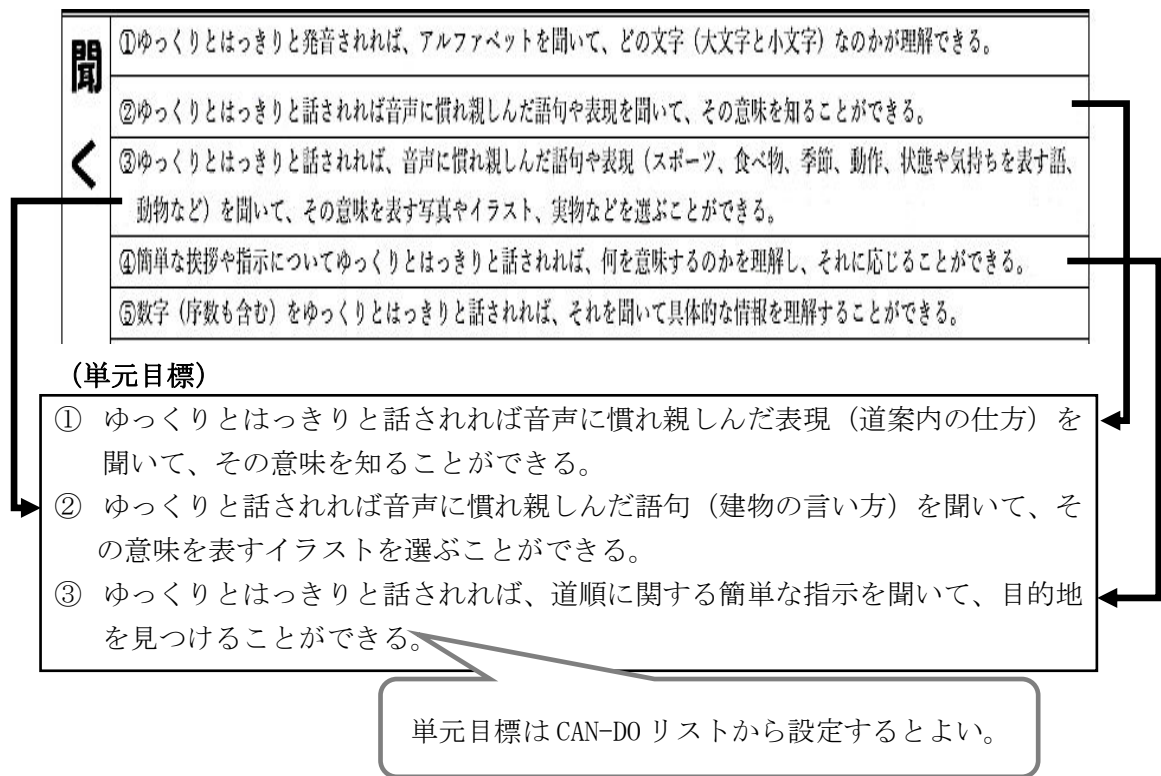
(1) 単元目標の設定

CAN-DO リストの項目と各単元のねらいをすり合わせた単元目標を CAN-DO 形式で設定する。そのため、年間指導計画例を見て、各単元のねらいや学習活動を確認することから始めた。そして、「聞く・読む・話す（やりとり）・話す（発表）・書く」の4技能5領域のうち、どれを中心に扱う単元なのかを考えた。

次に、CAN-DO リストの活動目標を各単元のねらいにあてはめた。その際、ある単元を特に「聞く」ことを育成するのに適する単元と判断した場合、CAN-DO リストの「聞く」領域からどの項目を単元に位置付けていくのかを考えた。以下は、Lesson4「Turn right.」(Hi, friends!②文部科学省)を「聞く」ことの育成に適する単元と設定した場合の、CAN-DO リストを参照して設定した単元目標である。

単元目標の設定例

「新学習指導要領に基づいた CAN-DO リスト案 小学6年（聞く）領域から抜粋」（VI 資料2より）



(2) 単元の評価規準

次に、(1) で設定した目標をどの観点で評価するのかを考え、評価規準を設定した。新学習指導要領によると、新たな観点は「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つである。研修ガイドブック（文部科学省 2017）によると、これらの観点に関してそれぞれ次のような内容となっている。

「知識及び技能」では、「音声に十分慣れ親しんだ文字、語彙、文構造、言語の働きなどを知識として理解し、技能として使えること」が目標であるとなっている。

「思考力・判断力・表現力」では、「音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、聞いたりして内容を理解することや、自分の伝えたい内容をどのように工夫して伝えるのかを考えること」となっている。

「主体的に学習に取り組む態度」では、「外国語の文化の理解を深め、他者に配慮しながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとすること」となっている。

以上の3観点を反映させた指導案のフォーマットを作成した（表3）。以下の実践事例ではこのフォーマットを使用している。

1 単元の目標

CAN-DO リストを参考に、単元のねらいを CAN-DO 形式で設定する

2 単元の評価規準

上記で設定した目標をどの観点で評価するのかを示す。

ア. 知識・技能	イ. 思考力・判断力・表現力	ウ. 主体的に学習に取り組む態度

上記の目標が3観点のうち、それぞれどれにあてはまるのかを明記する。

3 指導と評価の計画

時間	ねらい、学習活動	単元の評価規準	評価方法
	各授業でのねらいと学習活動を明記	学習活動をどの観点で評価するのか、評価規準を明記	筆記テスト、行動観察、パフォーマンステスト等で評価する。

4 観点別評価の進め方

それぞれの評価規準ごとに、A:「十分できた」、B:「だいたいできた」、C:「努力を要する」を判断していく。

表3

2 実践例①:「聞くこと」に焦点を当てた実践

これは、6年生(74名)を対象に「聞くこと」を育成するのに適する単元として「Turn right. (Hi, friends!② Lesson4)」を取り上げた指導計画である。

(1) 指導計画

① 単元の目標

- ① ゆっくりとはっきりと話されれば音声に慣れ親しんだ表現(道案内の仕方)を聞いて、意味を理解することができる。
- ② ゆっくりと話されれば音声に慣れ親しんだ語句(建物の言い方)を聞いて、その意味を表すイラストを選ぶことができる。
- ③ ゆっくりとはっきりと話されれば道順に関する簡単な指示を聞いて、目的地を見つけることができる。

2 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① ゆっくりとはっきりと話されれば音声に慣れ親しんだ表現（道案内の仕方）を聞いて、意味を理解することができる。	② ゆっくりと話されれば音声に慣れ親しんだ語句（建物の言い方）を聞いて、その意味を表すイラストを選ぶことができる。 ③ ゆっくりとはっきりと話されれば道順に関する簡単な指示を聞いて目的地を見つけることができる。	/

注) この単元で、行動の観察や提出物等といった評価方法を通して、「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価することも可能であるが、この事例では「聞くこと」に特化して評価すると言う趣旨から以上の評価規準を設定している。

3 指導と評価の計画（4時間）

時間	ねらい、学習活動	単元の評価規準	評価方法
1	町中にある様々な建物や道案内の言い方を知り、日本語との違いに気付くとともに音声に慣れ親しむ。 ○「What's this?ゲーム」絵カードを見て、それが何かを答えながら建物の言い方を知る。 ○おはじきゲーム、ミッシングゲーム等で建物の言い方に慣れ親しむ。 ○「どこに行くのかな?」道案内の言い方を知る。		
2	町中にある様々な建物や道案内の言い方を聞いて意味を理解することができる。 ○サイモンセズゲームで道案内の言い方を復習する。 ○「Turn right ゲーム」目を閉じて指導者の言う動作を行う。 ○【Listen】○「仲間探しゲーム」	ア① イ②	筆記テスト (後日)
3	目的地への行き方を尋ねたり、言ったりする表現に慣れ親しむ ○「どこにあるのかな?」指導者の道案内を聞き、ワークシート上に絵カードを置いて地図を作る。 ○【Activity】ペアになり、地図上の空欄に置いた建物の位置を道案内で教え合う。		
4	相手に目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく道案内をしたりする。 ○「友だちを案内しよう①」ワークシート上に絵カードを置いて地図を作り、道案内をし合う。 ○「友だちを案内しよう②」机上に建物の絵カードを置いて、教室を町	イ③	筆記テスト (後日)

	に見立てて道案内をし合う。		
次回	筆記テスト		
	1 建物の言い方を聞いて、その意味に適するイラストを選ぶ問題	イ②	
	2 道案内の言い方を聞いて、その意味を選ぶ問題	ア①	
	3 目的地への行き方を聞いて目的地を見つける問題	イ③	

4 観点別評価の進め方

それぞれ A：「十分できた」、B：「だいたいできた」、C：「努力を要する」のどの状況にあるのかを、次のような点から判断していく。

ア 知識・技能（以下、アと示す）

この観点では、実際に道案内をする場面で活用できる表現を理解するとともに、道案内をするのに必要な技能を身につけているかどうかを評価している。

イ 思考力・判断力・表現力（以下、イと示す）

この観点では、表現で使用される語句や会話などを、イラストを参考にしながら聞いて、必要な情報を得ているかどうかを評価している。

実際の評価方法と評価の結果、A、B、Cと判断した規準例をア①、イ②、イ③について以下に示す。

(2) 判断規準例

(1) の指導計画に基づき、実践・評価を行った評価方法と、A、B、Cと評価した規準例を以下に示していく。

ア 知識・技能

ここでは、「①ゆっくりとはっきりと話されれば音声に慣れ親しんだ表現（道案内の仕方）を聞いて、意味を理解することができる」の評価について見ていきたい。それを判断するために筆記テストを用いた。問題については以下のようなリスニングテストを実施した。問題（写真2）は、ALTが言った英語が、どの意味を表すのかを記号で選ぶものである。

問題：ALTが英語で言った指示の意味はどれですか。記号を選びましょう。

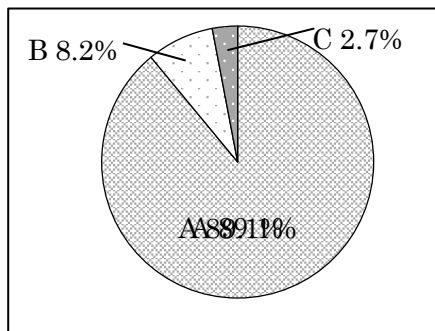
2 ALTが英語で言った指示の意味はどれですか。それぞれ選んで、記号を○で囲みましょう。			
(1)	ア：まっすぐ進んでください。	イ：右へ曲がってください。	ウ：左へ曲がってください。
(2)	ア：まっすぐ進んでください。	イ：右へ曲がってください。	ウ：左へ曲がってください。
(3)	ア：まっすぐ進んでください。	イ：右へ曲がってください。	ウ：左へ曲がってください。

ALTの言った英語
(1) Turn right.
(2) Go straight.
(3) Turn left.

写真2



この結果



評価の判断基準

- A：音声を聞いてその意味をすべて理解することができる。
- B：音声を聞いて『right』と『left』の語の意味を理解することができる。
- C：音声を聞いて、意味を理解するのはまだ難しい。

グラフ1

この問題は道案内をする上で用いられる表現を理解しているかどうかを確かめるものである。

Cについては、“Go straight.”と聞いて、その意味が理解できても、“Turn right.”と“Turn left.”を聞いて、それらの意味をすばやく理解することがまだ難しいケースも見られた。ほとんどの児童は、第2時の授業でゲーム活動を交えながら、“Turn right.”と“Turn left.”の意味をしっかりと理解していたように感じられたが、テストの結果からCの基準を有する学習者に合わせて、今後の授業においても再び確認していく必要があると分かった。

イ 思考力・判断力・表現力

ここでは、「②ゆっくりと話されれば音声に慣れ親しんだ語句（建物の言い方）を聞いて、その意味を表すイラストを選ぶことができる」の評価について判断するためのテスト（写真3）を行った。

問題 先生が言った建物はどれなのか。記号を○で囲みましょう。

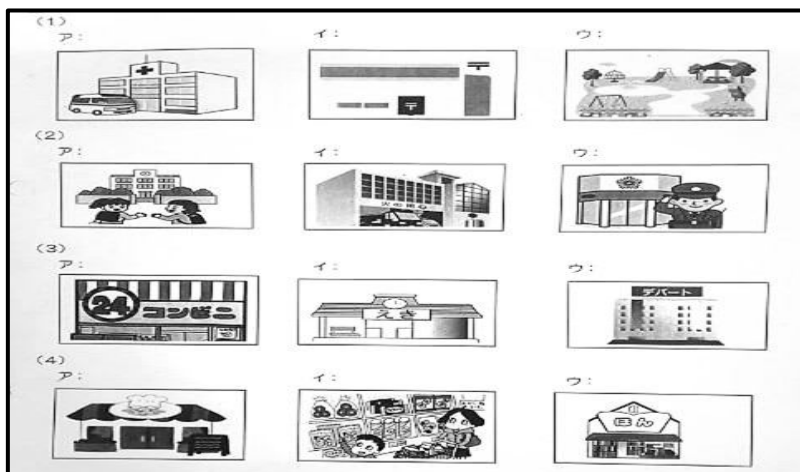
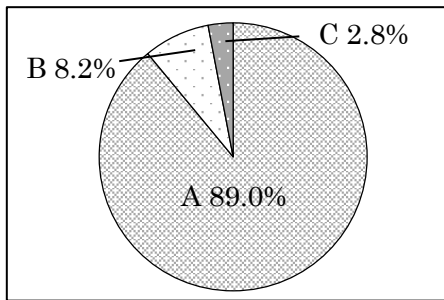


写真3



この結果



グラフ2

評価の判断基準

- A : 音声を聞いてその意味に適するイラストをすべて選ぶことができる。
- B : 音声を聞いてその意味に適するイラストを半分は選ぶことができる。
- C : 音声を聞いてその意味に適するイラストを選ぶのはまだ難しい。

この問題は 12 個の建物を示すイラストを提示し、音声を聞いてその意味に適するものを選ぶことになっている。授業で学習した語をすべて取り入れた問題で、ほとんどの児童が正解答を選択した。第1時の授業で、イラストを見ながら単語を聞いて、音読する活動を繰り返し取り入れてきたこと、第1時で学習した内容を第4時まで継続して導入したことが、理解の定着につながったのではないかと考えられる。

次に、「③ゆっくりとはっきりと話されれば道順に関する簡単な指示を聞いて、目的地を見つけることができる」の評価について判断するためのテスト（写真4）を行った。

問題 それぞれの道案内を聞き、たどり着いた場所はどこかを日本語で答えましょう。

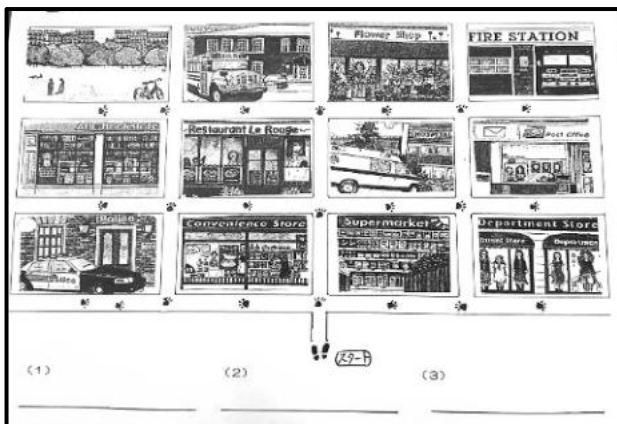
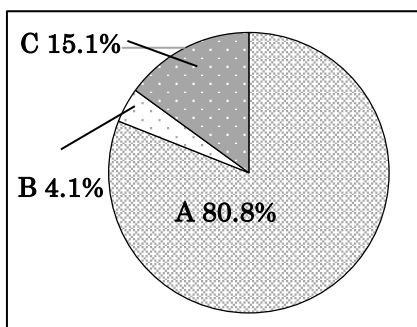


写真4

A L T が読んだ文

- (1) Go straight. Turn right. Go straight.
Go straight. Go straight. Turn left.
- (2) Go straight. Go straight. Turn right.
Go straight. Turn left.
- (3) Go straight. Go straight. Turn left.
Go straight. Go straight. Turn right.
Go straight. Turn left. Go straight.
Turn right. Go straight. Turn right.

この結果



グラフ3

評価の判断基準

- A : 音声を聞いて、その内容を理解して目的地をすべて見つけることができる。
- B : 音声を聞いて、その意味を理解して目的地を2つ見つけることができる。
- C : 音声を聞いて目的地を見つめるのはまだ難しい。

この問題では、道順に関する指示を聞き取り、それに応じて適切な目的地を見つけることが求められている。問題文には「どの建物なのかを日本語で答えましょう」と書かれているため、道順をしっかりと聞き取って適切な目的地を見つけられていても、日本語で答えないと正解にならないことになるが、聞き取った内容に適する目的地を選んだと分かるものについてはすべて正解とした。

Cは、音声の意味がほとんど理解できないケースだが、その一方で“Go straight.” “Turn right.” “Turn left.”の意味は理解できていても、“Go straight.”を途中で聞き逃したため、何番目の交差点で「右」もしくは、「左」へ曲がればよいのかが分からず、すべて正解答とずれてしまったケースもあった。

テストの結果から、音声を聞き取り、そこから必要な情報を得ながら道をたどる活動になると難易度が少し上がったことがわかる。今後の授業実践においてこうした活動を丁寧に取り組んでいかなければならないことが分かった。

3 実践例②：「読むこと」「書くこと」に焦点を当てた実践

これは5年生(62名)を対象に「読むこと」、「書くこと」を育成するのに適する単元として「What do you want?(Hi, friends!① Lesson5)」を取り上げた指導計画である。

(1) 指導計画

1 単元の目標

- ①音声に慣れ親しんだアルファベットの大文字をなぞり書きすることができる。
- ②手本を見て、アルファベットの大文字を4線枠内に視写することができる。
- ③音声に慣れ親しんだ上でアルファベットの大文字を見てゆっくりと適切な発音で音読することができる。
- ④相手に欲しいものについてすすんで相手に尋ねたり答えたりしている。

2 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①音声に慣れ親しんだ上で、アルファベットの大文字をなぞり書きすることができる。 ②手本を見て、アルファベットの大文字を4線枠内に視写することができる。	③音声に慣れ親しんだ上で、アルファベットの大文字を見てゆっくりと適切な発音で音読することができる。	④相手に欲しいものについてすすんで相手に尋ねたり答えたりしている。

3 指導と評価の計画（5時間）

時間	ねらい、学習活動	単元の 評価規準	評価方法
1	<p>身の回りで使われているアルファベットの大文字に気づき、読み方を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○アルファベットの文字を見ながら1つずつ音声を聞いて言う練習 ○誌面の絵からアルファベット大文字を探す ○ポインティングゲーム1、2 ○アルファベットチャンツ 	イ③	筆記テスト(後日)
2	<p>アルファベットの大文字を見て、読み方を知るとともに欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ポインティングゲーム1、3 ○アルファベットの視写練習 ○What do you want? 	ア① ア②	筆記テスト(後日)
3	<p>アルファベットの大文字を見て、読み方を知るとともに欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ポインティングゲーム1、4 ○What do you want?ラッキーカードゲーム ○音声を聞き、聞こえたアルファベットを線で結ぶ。 		
4	<p>積極的にアルファベットの大文字を読んで、欲しいものを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○【Let's Play 3】カード集めゲーム ○【Activity】見つけたアルファベットの大文字を視写する 	ウ④	行動観察
5	<p>積極的にアルファベットの大文字を読んで、欲しいものを尋ねたり、答えたりしようとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○【店屋さんごっこゲーム】列ごとで店員役と客役に分かれ、店員役の机の上にアルファベットカードを置く。店員役が客役に欲しいものを尋ねていく。 	ウ④	行動観察 振り返り カード
次回	<p>筆記テスト&読むテスト</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 アルファベット大文字を読んで、読めない文字を選ぶ問題 2 印字された大文字をなぞり書きする問題 3 手本を見て大文字を4線枠内に視写する問題 	イ③ ア① ア②	

4 観点別評価の進め方

以下の評価規準において、次のような視点から判断していく。

ア 知識・技能

アルファベットの大文字の形を知っているかどうかを評価した。

イ 思考力・判断力・表現力

アルファベットの大文字を見て、適切な発音で読めているかどうかを評価した。実際の評価方法と評価の結果、A、B、Cと判断した基準例をア①、ア②、イ③について以下に示す。(ウ④については省略する。)

(2) 判断規準例

(1)の指導計画に基づき、実践・評価を行った評価方法と、A、B、Cと評価した規準例を以下に示していく。

ア 知識・技能

ここでは、「①音声に慣れ親しんだ上でアルファベットの大文字をなぞり書きすることができる」の評価について見ていきたい。それを判断するために、次の問題(写真5)を導入した。

問題 アルファベットの大文字をなぞって書きましょう。

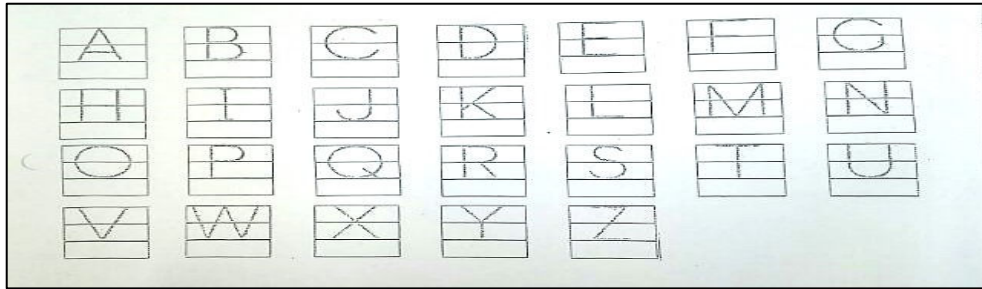
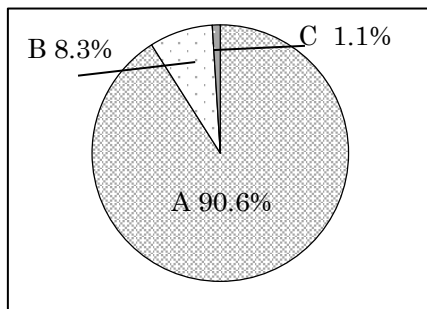


写真5



この結果



グラフ4

評価の判断基準

- A: すべてのアルファベットの大文字をなぞり書きすることができる。
- B: アルファベットの大文字をなぞり書きするが、所々で形に乱れが見られる。
- C: 半分以上なぞり書きするのが難しい。

この問題では、あらかじめ印字されたアルファベットの大文字を正確になぞり書きすることを求めている。つまり、「文字の形を知る」という段階までしか求めている。第2時の授業で書く活動を入れた際に、ほとんどの児童が正確になぞり書きをすることができていて、テストのときもよくできていたことが分かる。

しかし、この問題では、文字が読めなくても、なぞり書きという作業で終わり、文字の識別ができていないか否かを確認することができない。そこで、聞きとったアルフ

ァベットの大文字をなぞり書きするような問題にしていくと、「文字の形を知る」だけにとどまらず、音声を聞きとって文字の識別ができたか否かを確認められたのではないかと考えられる。

次に、「②手本を見て、アルファベットの大文字を4線枠内に視写することができる」の評価を判断するためにテスト（写真6）を行った。

問題. 次のアルファベットのお手本を見て、そのとおりに書きましょう。

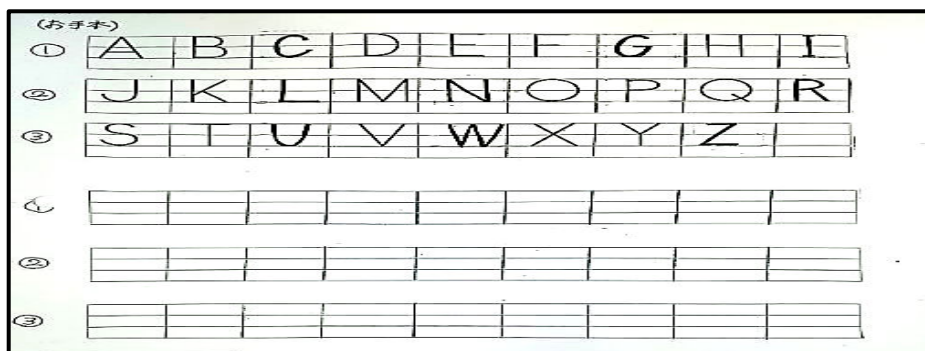
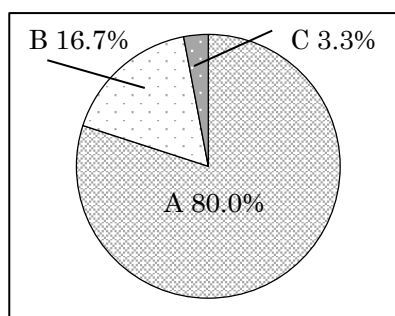


写真6



この結果



評価の判断基準

- A: すべてのアルファベットの大文字について4線枠内に視写することができる。
- B: 所々で4線枠からずれて、形に乱れがあるが、20文字以上は視写することができる。
- C: 4線枠内に文字を書くのはまだ難しい。

グラフ5

この問題ではアルファベットの大文字を4線枠内に正確に書けているかを確認めた。適切な字体として書けているが、4線枠からずれていたたり、手本の形通りに文字を書くことが難しい状況であったり、様々な解答が見られた。なぞり書きはできても、視写になると少し難しい児童がいることが分かった。聞くことや話すことだけでなく、文字を見て書くことを授業の中で繰り返して導入する必要がある。

イ 思考力・判断力・表現力

ここでは、「【1】音声に慣れ親しんだ上でアルファベットの大文字を見て、ゆっくりと適切な発音で音読することができる」の評価規準について判断するためのテストを行った。評価方法については、読みのテストを行い、読めなかった文字に印をつける。その際、ALTと分担して児童の音読を評価することにした。（写真7）がテスト問題である。

問題 つぎのアルファベットの文字を読んで、読めない文字を○で囲みましょう。

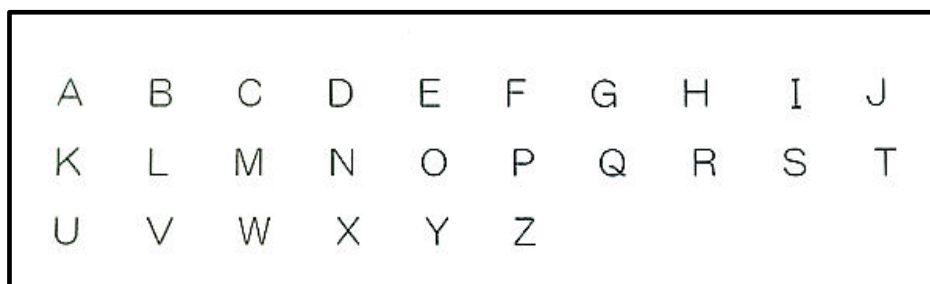
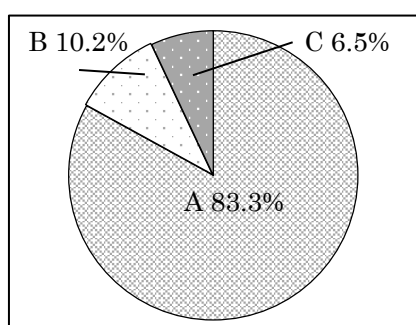


写真7



この結果



グラフ6

評価の判断基準

A：すべてのアルファベットの大文字を適切な発音で音読することができた。

B：読み方のわからない文字があったが、20文字以上は適切な発音で音読することができた。

C：大文字を適切な発音で音読するのはまだ難しい。

この問題では、アルファベットの大文字を適切な発音で音読することができるかどうかを確かめるものである。ほとんどの児童はすべての大文字を読むことができたが、特に、BとV、MとN、GとZの発音を識別するのが難しいという傾向も見られた。口の形に注意して1文字ずつ丁寧に発音していくことを継続して指導することが必要だとわかった。

4 実践例③：「話すこと（やりとり）」に焦点を当てた実践

これは6年2組(37名)を対象に「話すこと（やりとり）」を育成するのに適する単元として「Let's go to Italy. (Hi, friends!②Lesson5)」を取り上げた指導計画である。

(1) 指導計画

1 単元の目標

- ①行きたい国やその理由について、正しい発音でつまることなく話すことができる。
- ②行きたい国やその理由について、語順や文の使い方を間違えずに話すことができる。
- ③音声に慣れ親しんだ表現を用いて、行きたい国やその理由について質問したり、答えたりすることができる。
- ④自分の思いがはっきりと伝わるように、相手に行きたい国やその理由について話すことができる。

2 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>①行きたい国やその理由について、正しい発音でつまることなく話すことができる。</p> <p>②行きたい国やその理由について語順や文の使い方を間違えずに話すことができる。</p>	<p>③音声に慣れ親しんだ表現を用いて、行きたい国やその理由について質問したり、答えたりすることができる。</p>	<p>④自分の思いがはっきりと伝わるように相手に行きたい国やその理由について話すことができる。</p>

3 指導と評価の計画

時間	ねらい、学習活動	単元の評価規準	評価方法
1	<p>国名の言い方を知り、日本語と英語の音声の違いに気づくとともに音声に慣れ親しむ。</p> <p>○国旗の絵カードを見ながら音声を繰り返し聞き、一緒に言う練習をする。</p> <p>○「() に国名を書こう」「どの国の世界遺産か考えよう」音声を聞き、どの国を表しているかを確認する。</p>		
2	<p>行きたい国やその理由について尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。</p> <p>○後日、実施するインタビューで使用する表現について音声を繰り返し聞き、一緒に言う練習をする。</p> <p>★インタビューに向けて、自分の行きたい国や名所、食べたい物を考えてくるようにする（次回までの宿題）。考えの一助となるよう、廊下に様々な国の名所や食べ物を紹介した写真を掲示する。</p>	<p>ア①</p> <p>ア②</p>	<p>パフォーマンステスト（後日）</p>
3	<p>行きたい国について理由を尋ねたり、答えたりする表現を身につける。</p> <p>○前時で学習した表現を使って、自分の行きたい国やその理由についてどのように伝えたらよいかを確認していく。</p> <p>○自分の思いを相手にはっきりと伝える方法を皆で考えて、インタビューの時にできるよう練習をする。</p>	<p>イ③</p> <p>ウ④</p>	<p>パフォーマンステスト（後日）</p>
4	<p>A L T と一対一で以下の内容で会話をする。</p>	<p>ア①</p> <p>ア②</p> <p>イ③</p> <p>ウ④</p>	<p>パフォーマンステスト（インタビュー）</p>

実際のテストで使われた会話文は、この通りである。

ALT: Hello? What's your name?	児童: My name is (名前) .
ALT: O. K. Where do you want to go?	児童: I want to go to (行きたい国) .
ALT: Why?	児童: I want to see (見たいもの) . I want to eat (食べたいもの) . Where do you want to go?
ALT: I want to go to (行きたい国) .	児童: Why?
ALT: I want to see (見たいもの) . I want to eat (食べたいもの) .	児童: Good. (Nice. Oh!など) Thank you.

4 観点別評価の進め方

今回はインタビュー形式のパフォーマンステストを実施した。パフォーマンステストの場合はルーブリック (VI 資料3) に基づいて評価を行った。

(2) 判断規準例

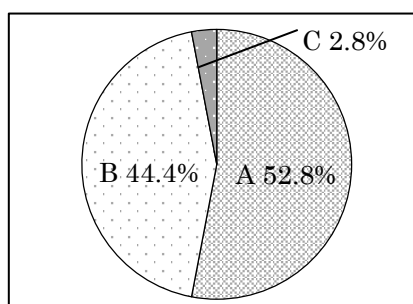
(1) の指導計画に基づき、実践・評価を行った評価方法と、A、B、C と評価する規準例を以下に示していく。

ア 知識・技能

ここでは、「①行きたい国やその理由について正しい発音でつまることなく話すことができる」の評価について、ルーブリック (VI 資料3) を使用して判断を行った。



この結果



評価の判断基準

- A: 正しい発音でスラスラと話すことができる。
- B: 少し間が空くが話すことができる。
- C: 会話がとまってしまう。発音が分かりにくい。

グラフ7

集計の結果は (グラフ7) の通りとなった。ALTにも加わってもらい、発音に関する評価を行ったが、発音の正確さについてはALTの評価と若干の差が見られた。そこで、インタビューテストの様子を撮影した動画を見て、再度ALTと話し合ってから判断基準を定めた。

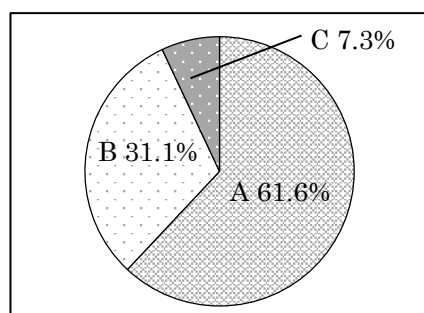
実践例①、②で導入した筆記テストの時とは異なり、Aの人数が大幅に減少してい

ることがわかる。実技になると頭の中では理解しているが、それをとっさにその場で表現することが難しくなるのではないかと思われる。

また、このような実技テストの経験が初めてなので、慣れていなかったり、緊張したりすることも要因の一つではないかと感じられた。

次に、「②行きたい国やその理由について語順や文の使い方を間違えずに話すことができる」の評価について、ルーブリック（VI 資料3）を使用して判断を行った。

この結果



グラフ8

評価の判断基準

A: 語順や文の使い方などほとんどが間違いなく話せている。

B: 語順や文の使い方など少し間違いがあるが、話せている。

C: 語順や文の使い方などほとんどが間違えている。

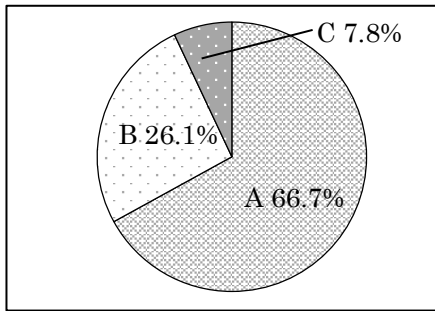
結果は（グラフ8）の通りである。ここでは、行きたい国や理由について述べる際に、語順や文の使い方が正確であったかどうかを確かめている。半数以上は正確な使い方では伝えられたが、中には所々で単語が抜けてしまい、ALTの助けを必要としたケースが見られた。例えば、相手に行きたい国について尋ねる際に、「Where do you want to go?」のところを「Where do you want・・・?」とつまってしまう。

そこで、ALTが「want to go」と伝えるなど、適宜支援をしたところ、言い直して適切に尋ねることができた児童も多く見られた。この場合の評価はBとした。

イ 思考力・判断力・表現力

ここでは、「③音声に慣れ親しんだ表現を用いて、行きたい国やその理由について質問し、答えることができる」の評価について、ルーブリック（VI 資料3）を使用して判断を行った。

この結果



グラフ9

評価の判断基準

- A：音声に慣れ親しんだ表現を使って、適切に質問したり、答えたりすることができる。
- B：音声に慣れ親しんだ表現を使って話す、質問や答える時に一部間違いが見られる。
- C：音声に慣れ親しんだ表現を使って話すのが難しい。

ここでは、行きたい国や理由について伝えるために必要な表現を使って、自分のことについて伝えられるかどうかを確かめた。言いたいことを英語でどう伝えるのかについて知っていても、会話の際に忘れてしまうケースが見られた。その場合は、ALTが出だしの語を1、2回言ってヒントを出すことによって、後に自分たちで会話を続けることができ、この場合の評価はBとした。ALTに質問して相手の答えを聞いた後で“Oh!” “Good!”と返したり、相手の答えを繰り返したりして反応を示すケースも見られた。今回は全員に対してここまで求めていなかったが、反応を示すやりとりができるよう今後取り組む必要があると感じた。

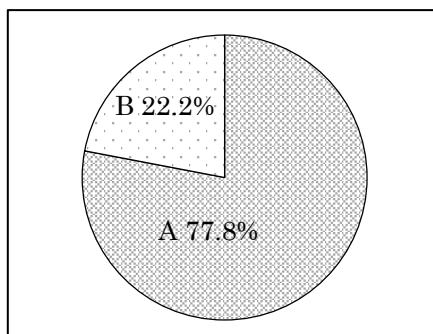
ウ 主体的に学習に取り組む態度

ここでは、「④自分の思いがはっきりと伝わるように相手に行きたい国やその理由について話すことができる」の評価について、ルーブリック (VI 資料3) を使用して判断を行った。この規準は、声の大きさとアイコンタクトを基にして評価の判断を行ったが、例えば、声の大きさがA、アイコンタクトがBの場合は、④の規準をAで評価した。

なぜなら、「主体的に学習に取り組む態度」とは、他者に配慮しながら相手に主体的にコミュニケーションをすることを確かめている観点であるため、まずは相手に伝わるような声の大きさと話すことが大切であると判断したからである。そこで、④の規準は声の大きさを重視して評価した。



この結果



グラフ10

評価の判断基準

- A：相手に伝わるような声の大きさとアイコンタクトにできるだけ気を付けて話している。
- B：アイコンタクトにできるだけ気を付けて話そうとしたが、時々聞き取りにくい声の大きさと話している。
- C：相手に伝わるように話すのがまだ難しい。

(グラフ 10) の結果から、本単元の 3 時間目で、相手に伝えやすくするために何に気を付けるべきかを自分たちで考えさせ、それらを全体で共有してから練習につなげたことで、自分なりに理解できたのではないかと考えられる。しかし、アイコンタクトができていなかったケースも見られたので、今後の授業で繰り返し指導していく必要がある。

5 実践例④：「話すこと（発表）」に焦点を当てた実践

6 年 1 組 (37 名) を対象に「話すこと（発表）」を育成するのに適する単元として「Let's go to Italy. (Hi, friends!②Lesson5)」を取り上げた指導計画である。

(1) 指導計画

1 単元の目標

- ①行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを正しい発音でつまることなく話すことができる。
- ②行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを語順や文の使い方を間違えずに話すことができる。
- ③音声に慣れ親しんだ表現を用いて、行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる。
- ④相手にわかりやすく伝わるように、行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる。

2 単元の評価規準

ア. 知識・技能	イ. 思考力・判断力・表現力	ウ. 主体的に学習に取り組む態度
①行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを正しい発音でつまることなく話すことができる。 ②行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを語順や文の使い方を間違えずに話すことができる。	③音声に慣れ親しんだ表現を用いて、行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる。	④相手に分かりやすく伝わるように行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる。

3 指導と評価の計画

時間	ねらい、学習活動	単元の評価規準	評価方法
1	国名の言い方を知り、日本語と英語の音声の違いに気づくとともに音声に慣れ親しむ		

	<p>○国旗の絵カードを見ながら音声を繰り返し聞き、一緒に言う練習をする。</p> <p>○「()に国名を書こう」「どの国の世界遺産か考えよう」の音声を聞き、どの国を表しているかを確認する。</p>		
2	<p>行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを伝えるために必要な表現に慣れ親しむ</p> <p>○「Let's go to～」「You can see(eat)～」「I want to～」の表現について、ALTの音声を繰り返し聞き、一緒に言う練習をする。</p> <p>★発表に向けて、自分の行きたい国や名所、食べ物を考えてくるようにする。(次回までの宿題) 考えの一助となるよう、廊下に様々な国の名所や食べ物を紹介した写真を掲示する。</p>	<p>ア①</p> <p>ア②</p>	<p>パフォーマンステスト</p> <p>(後日)</p>
3	<p>行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことについて、発表の仕方を学ぶ。</p> <p>○前時で学習した表現を使って、自分の行きたい国の紹介としたいことについて、どのように伝えたらよいかを確認していく。</p>	<p>イ③</p>	<p>パフォーマンステスト</p> <p>(後日)</p>
4	<p>自分の発表が相手に伝わりやすくするための工夫点を考える。</p> <p>○発表のモデル2例を見て、相手にわかりやすく伝えるための工夫点を皆で考え合い、発表の時にできるよう練習をする。</p>	<p>ウ④</p>	<p>パフォーマンステスト</p> <p>(後日)</p>
5	<p>書画カメラを使用し、大型テレビに映る写真やイラストを示しながら、以下の発表を行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>Hello. My name is (名前) .</p> <p>Let's go to (好きな国).</p> <p>You can see (名所) . You can eat (食べ物) .</p> <p>I want to (したいこと) . Thank you.</p> </div>	<p>ア①</p> <p>ア②</p> <p>イ③</p> <p>ウ④</p>	<p>パフォーマンステスト (発表)</p>

4 観点別評価の進め方

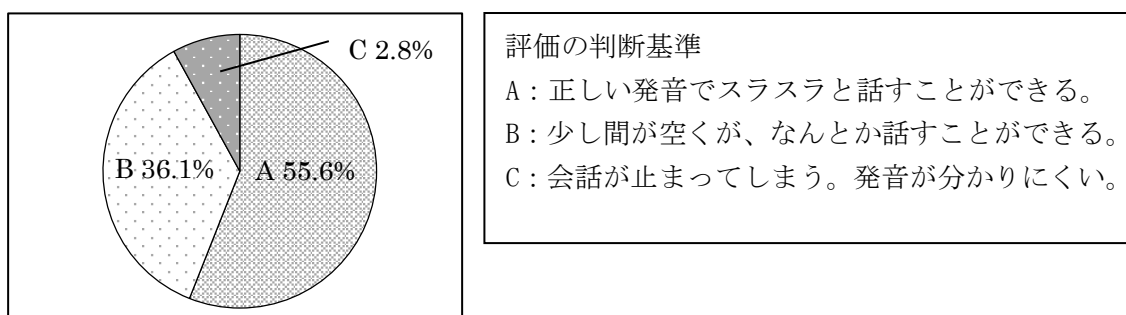
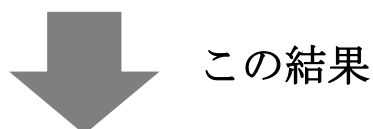
今回は発表形式のパフォーマンステストを実施した。パフォーマンステストの場合はルーブリック (VI 資料4) に基づいて評価を行った。

(2) 判断規準例

(1) の指導計画に基づき、実践・評価を行った評価方法と、A、B、Cと評価する規準例を以下に示していく。

ア 知識・技能

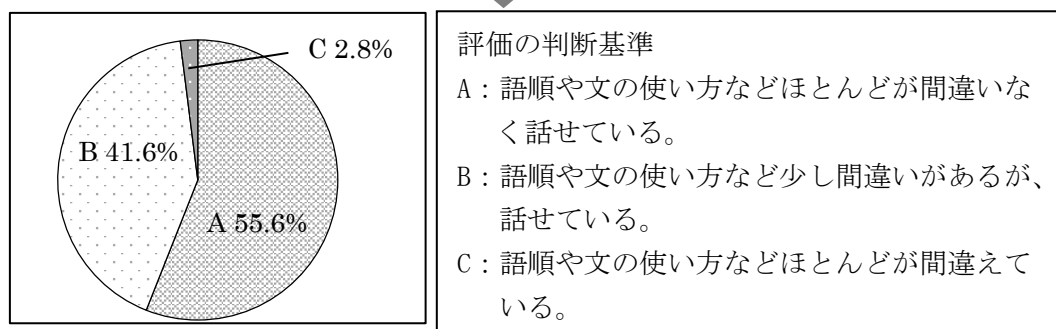
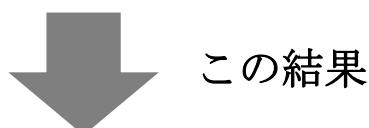
ここでは、「①行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを正しい発音でつまることなく話することができる」の評価について、ルーブリック（Ⅵ 資料4）を使用して判断を行った。



グラフ11

集計の結果は（グラフ11）の通りである。インタビューの時と同様、発表の様子を撮影した動画を見て、ALTと再び話し合ってから判断基準を定めた。上記の結果から、練習の時は伝えたい内容を言えていたが、発表の時には、やはりスラスラと言うのが難しかったと考えられる。

次に、「②行きたい国の紹介と自分がそこでしたいことを語順や文の使い方を間違えずに話することができる」の評価について、ルーブリック（Ⅵ 資料4）を使用して判断を行った。

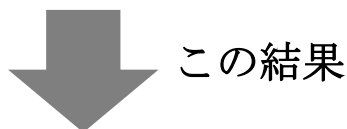


グラフ12

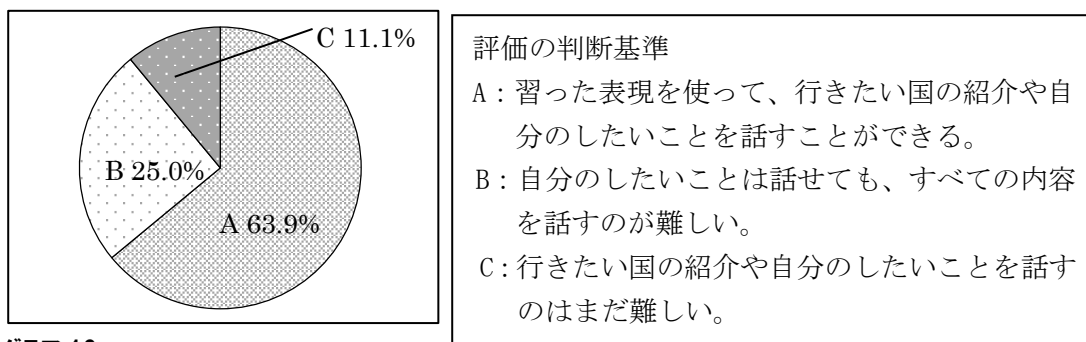
結果は（グラフ12）の通りである。ここでは、発表の英文を適切に理解して言えているかどうかを確認した。何とか言いたい内容を相手に伝えられたが、文の使い方の中で、時々間違いが見られた場合はBと判断した。これについても、Aの数値が半数しかいなかったため、繰り返し話す活動を導入することが大切だと感じた。そのためには、毎日英語に慣れ親しみ、話す機会を設けることが必要なのではないかと考える。

イ 思考力・判断力・表現力

ここでは、「③音声に慣れ親しんだ表現を用いて、行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる」の評価について、ルーブリック（Ⅵ 資料4）を使用して判断を行った。



この結果



グラフ 13

集計の結果は（グラフ 13）の通りとなった。ここでは、自分が行きたい国やそこでしたいことを相手に話せたかどうかを確かめた。習った表現を使って、自分の思っていることを伝えられたかどうかについては、半数以上がAとなった。全体的に、自分が考えた内容を伝えることに関して意欲的であった。

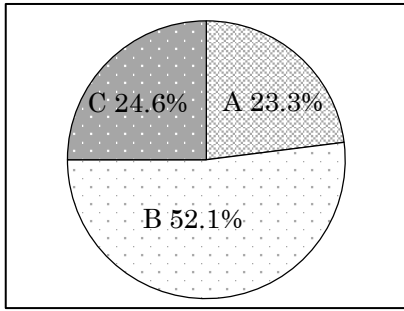
ウ 主体的に学習に取り組む態度

ここでは、「④相手に分かりやすく伝わるように行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる」の評価について、ルーブリック（Ⅵ 資料4）を使用して判断を行った。この規準は、声の大きさと資料の提示の仕方に基づいて評価の判断を行ったが、例えば、声の大きさがA、提示の仕方がBの場合は、④の規準をAで評価した。また、声の大きさがB、提示の仕方がCの場合、④の規準はBで評価した。

その理由については実践例③の時と同様で、④の規準は、他者に配慮しながら相手に主体的にコミュニケーションをすることを確かめているため、まずは相手に伝わるような声の大きさで話すことが大切であると判断したからである。そこで、④の規準は声の大きさを重視して評価した。



この結果



グラフ 14

評価の判断基準

- A：相手に伝わるような声の大きさを話ことができ、発表に使う写真等をできるだけ分かりやすく提示するようにしている。
- B：発表に使う写真等をできるだけ分かりやすく提示しているが、時々聞きとりにくい声の大きさを話している。
- C：相手に伝わるように話すのがまだ難しい。

結果は（グラフ 14）の通りとなった。この結果から大きな課題が見られた。それは、全体的に自分の意見を堂々と大きな声で述べることができていなかったところである。前時の授業で発表のモデルを見て、自分たちで声を大きくすることが大切だと理解はできていたが、実際に自分が発表する際に声が小さくなってしまっているようだった。

インタビューと発表の大きな違いは、声の大きさである。1対1の会話形式は多少小さな声でも相手に聞こえる大きさとなる。しかし、発表ではクラス全体に聞こえる大きさをなければならない。そのため、もう少し発表で声の大きさに気を付けるよう授業で触れておかなければならなかった。

提示の仕方を評価の項目に入れようと思ったが、発表を初めて体験する児童にとっては、発表と資料提示の同時進行で精一杯であったため、今回は入れなかった。今後に向けて少しずつ取り入れていく必要がある。

IV まとめ

1 CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化について

CAN-DO リストを活用した指導と評価の一体化について、本研究で実際に行ってみた。結果、以下のことが分かった。

- (1) CAN-DO リストは具体的な目標を示したもので、指導の見通しをつけやすくする。
- (2) 具体的な目標の提示により、学習者が目標達成について確認できる。
- (3) 複数の教員が共通した目標をもって授業を進めることができる。
- (4) CAN-DO リストに基づいた指導計画を立てて、授業を行うことで、学習者の到達度をよりきめ細かく知ろうとする姿勢ができてくる。
- (5) 指導内容とテスト問題の内容においてズレが生じない。

(1) については、長沼(2015)が「学年を経るにしたがってどんな力が身に付くようになるのか把握しやすくなります。(中略) 英語を使って『何ができるか』を考え、活動を設計することで、文法という道具(言語材料)を使って、どのようなタスクをこなせるようになるのかを生徒に実感させることができます」と述べている通り、CAN-DO リ

ストを活用することで、学習者がどの段階まで理解しているかを把握して、次の目標に向けてどのように指導したらよいかを計画し、授業実践して、理解の到達度を確かめることが可能であると分かった。

(2)については、学習者が具体的な目標を知ることで、「何ができるようになったのか。次は何ができたらいいか」を把握して、学習意欲を向上させることができる。例えば、学習者がCAN-DO リストを見て、自身の到達度を把握できれば、実用英語技能検定を始めとする様々な資格試験において、どのレベルの試験に挑めばよいか分かりやすくなる。また、段階的に目標達成することで、学習者が自信をもつことができる。

(3)については、例えば同学年の授業を複数の教員で担当する際に、互いに共通の目標に基づいた指導を行うことで、指導の方向性や評価において互いのズレを防ぐことができる。その他、他学年または校種の異なる教員に対して、CAN-DO リストを提示することで、学習者の到達度が分かりやすくなり、一貫して目標を接続して確認することができる。

(4)については、指導計画を立ててから授業に挑むことで、学習者のつまずきがどこなのかをあらかじめ予想して、つまずき具合を学習者の様子からしっかりと把握するようになる。そうすることで、学習者の到達度を知ることができ、授業の中で見られた課題が明確になることが分かった。

(5)については、授業で指導していた内容がテストにつながっていなければ、当然評価における信憑性が低くなる。テストの問題は、設定した目標に基づいた指導を計画し、行った内容と結びついたものにならないと、指導と評価の一体化にならない。テストの問題が指導内容とつながるには、CAN-DO リストを活用した指導を行い、それに合わせた問題を取り入れることが有効である。

2 教科としての外国語教育とは

今までの外国語活動では、「聞くこと」「話すこと」から音声に慣れ親しんで、積極的に会話をしようとする態度の育成までが目標となっていた。しかし、高学年から外国語教育が導入されることで、慣れ親しみに終わらずに技能として身につけることが求められる。その技能を指導するためには、入念な手立てが必要であることがわかった。

特に、パフォーマンステストで大切なことは、学習者があらかじめ、良い例と悪い例を見て比較し、どのような伝え方が良いかを自分たちで考える機会をもった後、全体で気を付ける点を共有して、それに基づいて練習をする時間を設けることである。

本研究の授業で、実際上記の内容を実施したところ、児童から以下のような意見が出た。「声が大きくてよかった」、「発音がわかりやすかった」、「スラスラ言えている」、「相手を見て話していた」、「言ったことに反応していた」である。これらの意見をもとに、具体的な目標を設定してルーブリックを作成した。児童が自分たちで考えて気付いたことを目標にして、それが評価につながると、話すことに対する意欲が高まってきた。

3 さいごに

今回の研究で分かったことは、多くの児童が「英語をたくさん話せるようになりたい」という思いを抱いていることである。授業実践での児童の振り返りや感想を見てみると、「習った英語を使って外国の人たちと話してみたい」「英語の文字を書いてみたい」と、英語学習に対する意欲をもっている。以下は児童の感想の一部である。

- とてもきんちょうしたけど、ALTの先生としゃべっていたら分からなくてつまった時におしえてくれたのできんちょうが少しやわらいだと思う。初めてだから心配だったけどとても楽しかったです。
- 少しまちがったけど、また勉強してスラスラ話せるようにしたい。また、ALTの先生と話したい。次はすべてAになるようにしたい。
- ALTの先生をとこどこ見ないで話してたから今度また話すときがあったら、目を見て話したり、もっと英語をおぼえてALTの先生とまた話してみたいです。

このような中で、教員は「英語を教える！」ではなく、一緒に英語を使った活動を楽しみながら、多くの言葉を聞いて話し、音声に慣れ親しませることが指導の原点になると思われる。そこから、児童も文字を読んでみたり、書きなぞってみたりすることで英語に対する自信につなげていくのではないだろうか。

最後になりましたが、本研究にあたり、ご指導・ご協力いただきました修成小学校の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

V 引用資料・参考文献

- 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 文部科学省「平成 28 年度英語教育実施状況調査（中学校）」（2016）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236_07.pdf
- 文部科学省「平成 28 年度英語教育実施状況調査（都道府県別調査結果）」（2016）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236_09.pdf
- 文部科学省「各中・高等学校の外国語教育における CAN-DO リストの形での学習到達目標設定のための手引き」（2013）
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf

- 文部科学省「教育課程企画特別部会論点整理補足資料（観点別学習状況の評価について）」 (2016)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_1.pdf
- 京都府南丹市立殿田小学校、胡麻郷小学校、殿田中学校、京都府立園部高等学校『研究紀要』 (2017)
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校外国語）」 (2011)
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/chuu/10_chu_gaikokugo.pdf
- 文部科学省「Hi, friends!①、②学習指導案」 (2012)
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm
- 文部科学省「小学校学習指導要領 外国語活動・外国語教育」 (2017)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf
- 文部科学省「中学校学習指導要領 外国語教育」 (2017)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf
- 文部科学省「小学校学習指導要領比較対照表 外国語、外国語活動」 (2017)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/30/1384661_4_1_1.pdf
- 文部科学省「中学校学習指導要領比較対照表 外国語」 (2017)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5_1.pdf
- 文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」 (2017)
 ①http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf
 ②http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_2.pdf
- 樋口忠彦・高橋一幸『Q&A 中学校指導法事典』 教育出版 (2017)
- 吉田研作『小学校英語教科化への対応と実践プラン』 教育開発研究所 (2017)
- 長沼君主「Q&A でわかる CAN-DO リストの基礎知識 コロンブス 2 1 通信 Vol. 1」 光村図書 (2015)
http://www.mitsumuratosho.co.jp/28ckyokasho/download/eigo/28e_tsushin1_02.pdf
- 佐藤一嘉「教育 zine～明日の教育を創る人へのウェブマガジン 英語授業も生徒も激変するパフォーマンス・テストを取り入れよう！」 明治図書 (2014)
<https://www.meijitosh.co.jp/eduzine/interview/?id=20140537>
- 泉恵美子、萬谷隆一、アレン玉井光江、田縁真弓、長沼君主『小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル』 小学校英語評価研究会 (2017)

- 『英語教育 2017年4月号』 大修館書店 (2017)
- 『英語教育 2017年5月号』 大修館書店 (2017)
- 『英語教育 2017年6月号』 大修館書店 (2017)
- 『英語教育 2017年8月号』 大修館書店 (2017)
- 松下佳代『パフォーマンス評価』 日本標準ブックレット (2016)

VI 資料

資料1 新学習指導要領に基づいたCAN-DOリスト(案) 小学5年生対象

領域	活動目標
聞く	① ゆっくりとはっきりと発音されれば、アルファベットを聞いてどの文字(大文字)なのかを選ぶことができる。
	② ゆっくりとはっきりと繰り返し話されれば、音声に慣れ親しんだ語句や表現を聞いて、その意味を表す写真やイラスト、実物などを選ぶことができる。
	③ ジェスチャーをつけて音声に慣れ親しんだ上で、簡単な挨拶や指示をゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて、意味を理解し、応じることができる。
	④ 数字をゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて意味を理解することができる。
	⑤ 日付・時刻や値段などをゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて意味を理解することができる。
	⑥ 曜日や時間帯などをゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて意味を理解することができる。
	⑦ 音声に慣れ親しんだ語句や表現からなる短い文であれば、大切な人やものに関してゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて、イラストや写真を参考にして意味を理解することができる。
	⑧ 音声に慣れ親しんだ語句や表現からなる短い文であれば、身近な話題(一日の生活、行きたい国、物の場所や位置等)に関してゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて、イラストや写真を参考にして意味を理解することができる。
読む	① アルファベットの大文字の活字を見て、ゆっくりと大きな声で音読することができる。
	② 音声に慣れ親しんだ身近な単語や語句、簡単な文であれば、文字を指で追いながら、ゆっくりと大きな声で話し手の後に続けて模倣して発音することができる。
	③ 模倣して発音することができた単語や語句、簡単な文であれば、イラストや写真を参照にして、文字を見て意味を理解することができる。
話す(やりとり)	① (挨拶、名前や調子を尋ねる)などの簡単な挨拶をすることができる。
	② 簡単な指示や依頼をして、それらに応じて答えることができる。
	③ (I am sorry. / Thank you.)など、相手に謝り、お礼を言うことができる。
	④ 音声に慣れ親しんだ表現であれば、簡単な質問に対して、(Yes. / No.)を使って答えることができる。
	⑤ 音声に慣れ親しんだ日常生活の身近な話題(曜日、誕生日や好きな教科など)について質問したり、答えたりすることができる。
	⑥ 好きなものや欲しいものなどについて質問したり、答えたりすることができる。
話す(発表)	① 音声に慣れ親しんだ日常生活の身近な単語(時刻や日時、場所、メニュー、生活の様子など)を発音することができる。
	② 音声に慣れ親しんだ日常生活の簡単な挨拶や数字、日付、季節、天気を簡単な単語や語句で相手に伝えることができる。
	③ 音声に慣れ親しんだ単語を繋げて、好きなこと・得意なこと等について、相手に伝えることができる。
	④ 写真や物を使って、音声に慣れ親しんだ単語を繋げて、大切な人やものについて相手に伝えることができる。
	⑤ 音声に慣れ親しんだ簡単な語句を使って、自分の感情や感謝の気持ちなどを表現することができる。
	⑥ 音声に慣れ親しんだ学校行事や身近な話題について相手に伝えることができる。
書く	① アルファベットの大文字を指で空書きして、印字された活字をなぞり書きすることができる。
	② 音声に慣れ親しんだ簡単な単語・語句を指で空書きして、印字された活字をなぞり書きすることができる。
	③ 与えられた単語の中から選んで、4線の枠内に視写し、自分のこと(名前・趣味・好きな教科・誕生日など)について説明した文を完成させることができる。

領域	活動目標
聞く	① ゆっくりとはっきりと発音されれば、アルファベットを聞いて、どの文字（大文字と小文字）なのかが理解できる。
	② ゆっくりとはっきりと話されれば音声に慣れ親しんだ語句や表現を聞いて、その意味を知ることができる。
	③ ゆっくりとはっきりと話されれば、音声に慣れ親しんだ語句や表現（スポーツ、食べ物、季節、動作、状態や気持ちを表す語、動物など）を聞いて、その意味を表す写真やイラスト、実物などを選ぶことができる。
	④ 簡単な挨拶や指示についてゆっくりとはっきりと話されれば、何を意味するのかを理解し、それに応じることができる。
	⑤ 数字（序数も含む）をゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて具体的な情報を理解することができる。
	⑥ 日付・時刻や値段などをゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて具体的な情報を理解することができる。
	⑦ 曜日や時間帯などをゆっくりとはっきりと話されれば、それを聞いて具体的な情報を理解することができる。
	⑧ 音声に慣れ親しんだ語句や表現からなる短い文であれば、ゆっくりとはっきりと話されれば、自国の文化や住んでいる地域に関して必要なことをイラストや写真を参考にして、意味を理解することができる。
	⑨ 音声に慣れ親しんだ語句や表現からなる短い文であれば、ゆっくりとはっきりと話されれば、自分のことや身近な話題（学校生活など）について必要なことをイラストや写真を参考にして、意味を理解することができる。
	⑩ 音声に慣れ親しんだ語句や表現からなる短い文であれば、ゆっくりとはっきりと話されれば、思い出や将来の夢・職業について必要なことをイラストや写真を参考にして、意味を理解することができる。
読む	① アルファベットの大文字と小文字の活字を見て、ゆっくりと大きな声で音読することができる。
	② 音声に慣れ親しんだ身近な単語であれば、絵や写真などを手掛かりにゆっくりと音読することができる。
	③ 音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を見て、自国の文化や地域について、意味を推測して読むことができる。
	④ 自分のことや身近な話題（学校生活など）について、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を見て意味を推測して読むことができる。
	⑤ 思い出や将来の夢・職業について、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を見て意味を推測して読むことができる。
話す(やりとり)	① (挨拶、名前や調子を尋ねる)など簡単な挨拶を交わすことができる。
	② 音声に慣れ親しんだ表現であれば、教室で使われる英語での指示に対して、応じたり、答えたりすることができる。
	③ (I am sorry. / Thank you.)などの表現を用いて、相手に謝ったり、お礼を言ったりすることができる。
	④ 簡単な質問に対して、(Yes. / No.)を使って答えることができる。
	⑤ 相手のサポートがあれば、自国の文化や住んでいる地域について、音声に慣れ親しんだ表現を用いて相手に質問し、答えることができる。
	⑥ 日常生活の身近な話題（身近な人物、住んでいる町、思い出、スポーツなど）について、音声に慣れ親しんだ表現を用いて質問し、答えることができる。
	⑦ 思い出や将来の夢・職業について、音声に慣れ親しんだ表現を用いて質問し、答えることができる。
話す(発表)	① 音声に慣れ親しみ、模倣して発音することができていれば、日常生活の簡単な挨拶や数字、日付、季節、天気等を文で話すことができる。
	② 音声に慣れ親しんだ単語や表現を用いて、思い出や将来の夢・職業について、相手に話すことができる。
	③ 写真や物を参考にして、音声に慣れ親しんだ単語や表現を用いて、自国の文化や住んでいる地域について、相手に話すことができる。
	④ 音声に慣れ親しんだ簡単な語句や表現を使って、自分の感情や感謝の気持ちなどを文で話すことができる。
	⑤ 自分のことや身近な話題（学校生活など）について準備をしたうえで、音声に慣れ親しんだ単語や表現を用いて、相手に話すことができる。
書く	① 文字の読み方が発音されるのを聞いて、アルファベットの大文字と小文字を書くことができる。
	② 音声に慣れ親しんだ簡単な単語・語句のなぞり書きをした後で、視写することができる。
書く	① 日本語の語順との違いに気づきながら、音声に慣れ親しんだ簡単な文のなぞり書きをした後で視写することができる。
	② 音声に慣れ親しんだ語句や表現を使った例の中から、言葉を選んで視写し、自分のことや身近な話題（身近な人物、住んでいる町、思い出、オリンピックの競技など）について説明した文を完成させることができる。

資料3 ルーブリック「Let' s go to Italy. (Hi, friends!② Lesson5)」インタビュー

	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
	①話し方	②語順や文	内容	①声の大きさ	②アイコンタクト
A	正しい発音でスラスラと話すことができる。	語順や文の使い方などほとんどが間違いなく話せている。	音声に慣れ親しんだ表現を使って、適切に質問したり、答えたりすることができる。	はっきりと聞こえる声の大きさと話することができる。	しっかりと相手を見て、話すことができる。
B	少し間があくが、なんとか話すことができる。	語順や文の使い方など少し間違いがあるが、話せている。	音声に慣れ親しんだ表現を使って話す、質問や答える時に一部間違いがみられる。	一応、聞こえる声で話しているが、聞きとりにくいところがある。	相手を見て話すこともあるが、ときどき視線をそらす。
C	会話がとまってしまふ。発音がわかりにくい。	語順や文の使い方などほとんどが間違えている。	音声に慣れ親しんだ表現を使って話すのが難しい。	声が小さくてほとんど聞きとれない。	ほとんど相手を見て話すことができない。

資料4 ルーブリック「Let' s go to Italy. (Hi, friends!② Lesson5)」発表

	知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
	①話し方	②語順や文	内容	①声の大きさ	②提示の仕方
A	正しい発音でスラスラと話すことができる。	語順や文の使い方などほとんどが間違いなく話せている。	習った表現を使って、行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すことができる。	はっきりと聞こえる声の大きさと話することができる。	発表内容に合う写真等を使って相手にわかりやすく提示しながら、発表することができる。
B	少し間があくが、なんとか話すことができる。	語順や文の使い方など少し間違いがあるが、話せている。	自分のしたいことは話せても、すべての内容を話すのが難しい。	一応、聞こえる声で話しているが、聞きとりにくいところがある。	発表内容に合う写真等を使って提示しながら、発表するが、タイミングがずれてしまふ。
C	会話がとまってしまふ。発音がわかりにくい。	語順や文の使い方などほとんどが間違えている。	行きたい国の紹介や自分のしたいことを話すのはまだ難しい。	声が小さくてほとんど聞きとれない。	発表内容に合う写真等を使って提示しながら、発表をすることはまだ難しい。